

〈教育ノート〉

## 学生の養護教諭への志向性と 養護実習の自己評価、満足度との関連

大 川 尚 子\*, 倉 恒 弘 彦\*\*, 平 田 ま り\*\*,  
野 口 法 子\*\*\*, 藤 原 和 美\*\*\*

Positive relationship among the intensity of desire  
to nurse teacher (Yogo teacher), the degree of self-assessment  
and the satisfactory degree for the nursing training

Naoko Okawa, Hirohiko Kuratsune, Mari Hirata, Noriko Noguchi and Kazumi Fujiwara

**要約：**平成 21・22 年に本学で養護実習を履修した学生 138 名を対象として、学生の養護教諭への志向性と養護実習の自己評価、満足度との関連を知り、学生指導に生かすことと養護教諭養成教育の充実を図ることを目的に、養護実習の内容と自己評価や満足度、養護教諭への志向性とその回答理由などを調査した。その結果、健康観察、救急処置、保健指導など多岐に渡る内容の実習をしていた。学生のはほぼ全員（97.6%）が養護実習中に保健教育を体験していた。養護教諭への志向性が強くある者は他の者と比較して養護実習の自己評価が高く、満足度も高いことが明らかになった。

**Abstract：** To improve the nursing training in students who aim to become nursing teachers, we studied the contents, self-assessment, and satisfactory degree of nursing training in 138 students who learned the nursing training in our university between 2009 and 2010. We also studied the desire to nurse teacher (Yogo teacher) in same students, and investigate the mutual relations among the intensity of desire to nurse teacher (Yogo teacher), self-assessments, and satisfactory degree of nursing training. Our students learned lots of contents, such as health inspection, first aid, health guidance in the training, and the vast majority of students (97.6%) learned the health education during the nursing training. Interestingly, it is clear that the students who strongly desire to nurse teacher (Yogo teacher) had a high degree of self-assessment and a high satisfactory degree for the nursing training as compared to other students.

**Key words：** 養護実習 nursing training 実習内容 contents 養護教諭への志向性 the intensity of desire to nurse teacher (Yogo teacher)

---

\*関西福祉科学大学 健康福祉学部 准教授

\*\*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

\*\*\*関西福祉科学大学 健康福祉学部 講師

## I はじめに

近年、都市化、少子高齢化、情報化、国際化などによる社会環境や生活環境の急激な変化は、子どもの心身の健康にも大きな影響を与えており、学校生活においても生活習慣の乱れ、いじめ、不登校、児童虐待などのメンタルヘルスに関する課題、アレルギー疾患、性の問題行動や薬物乱用、感染症など、新たな課題が顕在化している。そのような状況の中、養護教諭は学校における健康の保持増進に関わる専門職として大きな役割を担っている。特に児童生徒等の心の健康問題については、観察力、判断力を統合した対応や他職種との調整能力、カウンセリング能力を求められている<sup>1)2)</sup>。

養護実習は、教育職員免許法第 5 条に基づいて定められ、その目的は、(1) 学校教育の実際について体験的総合的な認識を得る。(2) 教育者としての使命感と児童生徒への愛情を深め、教員としての資質向上の意欲を持つための機会とする。(3) 専門科目の養護や教職に関する専門科目の履修を通じて得られる専門的な知識・技能、理論・技術を教育活動の中で再構成し、児童生徒の発達の促進に適用するための実践的能力の基礎を形成する。(4) 教育実践に関し課題解決や創意工夫に必要な学問研究の能力態度の基礎を培うとされている。

養護実習は、職務内容の特徴から、保健室運営だけではなく、学校保健情報の把握、保健指導や保健学習といった集団への働きかけ、個人を対象とした保健指導や健康相談活動などを含んでいる<sup>3)</sup>。そのため実習内容は多岐に渡っている。児童生徒等の将来的な問題を予測し、その時代に対応できる養護教諭の育成・支援のためには、限られた実習期間の中で効果的に実習を展開する必要性は高い<sup>4)</sup>。

本学では、豊かな人間性と高い倫理観をもち、幅広い教養に裏づけされた専門的知識、技術および判断力を身につけ、養護教諭として社会に貢献できる人間の育成を目指している。特

に、心の健康問題や身体症状に関する知識、カウンセリング能力、健康問題を捉える力量や解決のための指導力、企画力、実行力、調整能力を身につけることを重視しており、1. カウンセリングマインドを持ち、ストレスマネジメントができる養護教諭、2. 生涯にわたって健康・安全に生活するための健康教育ができる養護教諭を目標にしている。

その目標を達成するためにも、効果的な養護実習を実施する必要があると重要であり、そのためには、現在の養護実習の内容を明らかにし、今後の指導に生かす必要があると考えた。

また、養護教諭養成機関における調査において、「養護教諭になりたいという志向性の強い者は、知識・技術などの到達度が高い」という報告がある<sup>5)</sup>。志向性とは、「意識が一定の対象に向かうこと。考えや気持ちがある方向を目指すこと。」であり、養護教諭養成課程には養護教諭に対する志向性の高い者が入学してくると言われている<sup>6)</sup>。

筆者らはこれまで、養護教諭養成課程の学生の志向性と適性感の変化についての調査<sup>7)8)</sup>進めてきた。その結果、志向性や適性感は在学中に学外実習等の影響を受け変化していくこと、子どもとの触れ合い体験が良い影響を及ぼすことなどを明らかとしてきた。そこで、本研究では、学生の養護教諭への志向性と養護実習の自己評価、満足度との関連を知り、学生指導に生かすことと養護教諭養成教育の充実を図ることを目的に、養護実習終了後の学生に対し、養護実習の内容と自己評価や満足度、養護教諭への志向性について調査した。

## II 対象及び方法

平成 21・22 年に本学で養護実習を履修した学生 138 名（平成 21 年 67 名、平成 22 年 71 名）を対象として、自己記入式質問調査を実施した。質問紙調査は記名式としたが、調査時に「記名は今後の進路指導の資料とするためのものであり、教育や研究以外の目的では使用しな

いこと、成績とは無関係であること」を確認し調査を行った。なお、調査用紙は養護実習オリエンテーション時に配布し、実習終了後回収した。回収率は100%であった。その中ですべての項目に回答している123名を解析対象者とした。

調査内容は、養護実習の内容、養護実習の自己評価とおよびその回答理由、養護実習の満足度とおよびその回答理由、養護教諭への志向性とおよびその回答理由などである。養護実習の自己評価は、「大変よくできた」「よくできた」「普通」「やや努力不足」「努力不足」の5件法で調査した。養護実習の満足度は、「大変満足」「満足」「普通」「やや不満足」「不満足」の5件法で調査した。養護教諭への志向性は、先行研究<sup>6)9)</sup>を参考に「ぜひともなりたい」「できればなりたい」「今はわからない」「できればなりたくない」「絶対になりたくない」の5件法で調査した。

統計解析には、統計解析ソフト SPSS ver 18.0 for Windows (SPSS Japan) を用いた。クロス集計を行ったものは、 $\chi^2$  検定を行った。有意水準は5%とした。

### Ⅲ 結 果

#### 1 養護実習の内容

「養護実習において見学・実施できた項目」を健康観察、測定、清潔、電法、創傷・手当、医療的ケア、緊急対策の項目に分けて回答を求めた結果を表1に示す。

保健室来室者の健康観察の項目は、見学では全身状態の観察が多く、次いで体温、実施では体温が多く、次いで全身状態の観察であった。

測定の項目は、見学では体重測定が多く、次いで身長測定、実施では身長測定が多く、次いで体重測定であった。

清潔の項目は、見学では歯磨きなどの口腔清潔が多く、次いで手洗い、実施では手洗いが多く、次いで歯磨きなどの口腔清潔であった。

電法の項目は、見学ではアイスパックが多

表1 養護実習において見学・実施出来た項目・内容 (n=123)

見学・実施項目	内容	見学		実施	
		人	%	人	%
健康観察	体温	88	71.5	123	100.0
	脈拍	57	46.3	47	38.2
	呼吸	29	23.6	17	13.8
	血圧測定	7	5.7	6	4.9
	全身状態の観察	89	72.4	81	65.9
	意識状態	27	22.0	18	14.6
測定	身長測定	49	39.8	69	56.1
	体重測定	51	41.5	67	54.5
	視力測定（並列）	32	26.0	42	34.1
	視力測定（単一）	35	28.5	36	29.3
	聴力測定	11	8.9	11	8.9
清潔	歯磨きなどの口腔清潔	36	29.3	26	21.1
	手洗い	35	28.5	62	50.4
	その他の部位の清潔	18	14.6	17	13.8
電法	温電法（ホットパック）	4	3.3	4	3.3
	温電法（湯たんぽ）	6	4.9	6	4.9
	温電法（電気あんか）	0	0.0	0	0.0
	冷電法（氷枕）	32	26.0	27	22.0
	冷電法（アイスパック）	75	61.0	96	78.0
	冷電法（湿布）	72	58.5	110	89.4
創傷・手当	創の洗浄	76	61.8	109	88.6
	消毒（消毒方法）	75	61.0	115	93.5
	モイストヒーリング	1	0.8	1	0.8
	止血（方法）	55	44.7	56	45.5
	包帯（巻軸帯）	46	37.4	32	26.0
	包帯（三角巾）	17	13.8	9	7.3
	包帯（ネット包帯）	38	30.9	22	17.9
	包帯（副木・シーネ固定）	18	14.6	2	1.6
	湿潤療法	14	11.4	7	5.7
	吸引	2	1.6	1	0.8
医療的ケア	吸入	7	5.7	0	0.0
	血糖測定	5	4.1	0	0.0
	点眼	43	35.0	20	16.3
	内服薬管理	25	20.3	5	4.1
	その他	5	4.1	1	0.8
緊急対策	緊急非常時の対応	28	22.8	8	6.5
	防災と避難救助	8	6.5	7	5.7

く、次いで湿布、実施では湿布が多く、次いでアイスパックと冷罨法が多かった。

創傷・手当の項目は、見学では創の洗浄が多く、次いで消毒、実施では消毒が多く、次いで創の洗浄であった。

医療的ケアの項目は、見学では点眼が多く、次いで内服薬管理、実施では点眼が多かったが、内服薬管理は少なかった。

緊急対策の項目は、緊急非常時の対応の見学が約 2 割であったが、実施は少なかった。

「体験できた救急処置及び手当」の結果を表 2 に示す。

体験できた救急処置及び手当では、すり傷が最も多く、次いで腹痛、頭痛、発熱、風邪の順であった。

「救急車を呼ぶ場面に遭遇した」結果は、1 人 (0.8%) であり、同伴受診に付き添う場面に遭遇した」結果は、18 人 (14.6%) であった。

「日本スポーツ振興センターの手続きをした」結果は、手書き申請 36 人 (21.1%)、コンピュータ申請 73 人 (59.3%) であった。

「医療券の手続きをした」結果は、46 人 (37.4%) であった。

「保健教育を体験した」の結果は、120 人 (97.6%) 保健指導 83 人 (67.5%)、保健学習 11 人 (8.9%)、どちらもした 26 人 (21.1%) であった。

保健指導のテーマは、「けがの手当て」「目の健康」「食育」「汗」「歯」「手洗い」等多岐にわたっていた。保健学習のテーマは、「心の健康」

「育ちゆく体とわたし」「毎日の生活と健康」等であった。

## 2 養護実習の自己評価

「養護実習の自己評価」を 5 段階でした結果、大変よくできた 4 人 (3.3%)、よくできた 70 人 (56.9%)、普通 33 人 (26.8%)、やや努力不足 16 人 (13.0%)、努力不足 0 人 (0%) であった (図 1)。

自己評価が高かった理由は、「授業や保健日より、掲示物など積極的に取り組んだ。」「児童とのコミュニケーションを積極的に行うことができた。」「毎日目標を持って、積極的に子どもと関わった。」「養護教諭に掲示物などでほめられた。」「実習に対する姿勢で校長先生方におほめの言葉をいただいた。」「先生方と良い関係を築くことができた。」があげられた。

低かった理由は、「事前準備が足りなかった。」「質問されたことに答えられなかったことが多くあった。」「救急処置の勉強が足りなかった。」「救急処置でどうしたらよいかわからずあわてた。」「救急処置の知識不足でいざとなったときできないことが多かった。」「保健指導が上手く出来なかった。」「保健指導の指導案が上手く書くことができなかった。」「もっとしっかり指導案を書く練習をしておけばよかった。」「大学ですすんで模擬授業をしておけばよかった。」があげられた。

表 2 体験できた救急処置及び手当 (n = 123)

疾病・受傷	人	%	疾病・受傷	人	%
風邪	94	76.4	捻挫	74	60.2
腹痛	101	82.1	骨折・打撲	83	67.5
頭痛	99	80.5	鼻出血	90	73.2
発熱	96	78.0	過呼吸	5	4.1
切創	82	66.7	てんかん	2	1.6
すり傷	106	86.2	保健室登校	19	15.4

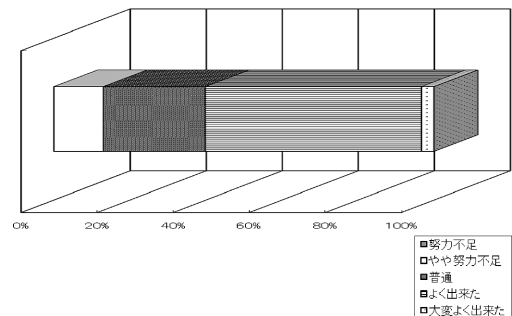


図 1 養護実習の自己評価

### 3 養護実習への満足度

「養護実習の満足度」を5段階で質問したところ、大変満足 59 人 (48.0%)、満足 52 人 (42.3%)、普通 8 人 (6.5%)、やや不満足 4 人 (3.3%)、不満足 0 人 (0%) であった (図 2)。

満足度が高かった理由は、「子どもと多く関わることができた。」「救急処置や保健日より、掲示物、授業など多くの経験ができた。」「子ども実態を把握することができた。」「多くの健康課題に直面し、理論と実際の違い、実践の難しさ、対応において改善すべき点を学ぶことができた。」があげられた。

低かった理由は、「救急処置が全然できなかった。」「保健指導が大変だった。」「体調不良になった。」があげられた。

### 4 養護教諭への志向性

「養護教諭への志向性」を5段階で質問したところ、ぜひともなりたいたい 89 人 (72.4%)、できればなりたいたい 25 人 (20.3%)、今はわからない 6 人 (4.9%)、できればなりたくない 2 人 (1.6%)、絶対になりたくない 1 人 (0.8%) であった (図 3)。

志向性が高かった理由は、「子どもの成長を直接見ることができてやはりなりたいたいと思った。」「実習に行って、実際に児童と触れ合ってやはりここで働きたいと感じた。児童の笑顔を見てやりがいを感じた。」「自分を必要としてくれる子どもを対応して元気になる姿にとってもや

りがいを感じた。」「実習で子どもたちと触れ合い、養護教諭の先生の活躍ぶりを拝見して改めてなりたいたいと思った。」「保健指導などで子どもたちが学んだことで行動が変わったことがうれしかった。」「子どもたちを笑顔にしていけることができると実感した。」「子どもと関わり素直な気持ちや笑顔に触れ、たくさんの元気をもらうことができる素敵な職だと感じた。」があげられた。

低かった理由は、「実際の現場は思っていた以上に厳しかった。」「養護教諭の仕事は大変だった。」があげられた。

### 5 志向性と自己評価・満足度との関係

養護教諭への志向性の質問に、「ぜひともなりたいたい」と回答した者を『志向性強く有』、「できればなりたいたい」「今はわからない」「できればなりたくない」「絶対になりたくない」と回答した者を『その他』として、養護実習の自己評価の質問に「大変よくできた」「よくできた」と回答した者を『自己評価高』、「普通」「やや努力不足」「努力不足」と回答した者を『その他』として、養護実習の満足度の質問に、「大変満足」「満足」と回答した者を『満足度高』、「普通」「やや不満足」「不満足」と回答したものを『その他』として比較すると、養護教諭への志向性が強くある者はその他の者と比べて、養護実習の自己評価の高い者及び満足度の高い者の割合が有意に高かった (表 3)。

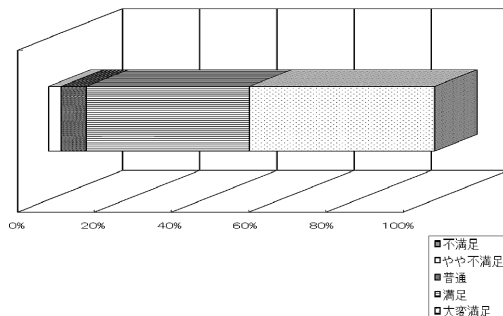


図 2 養護実習の満足度

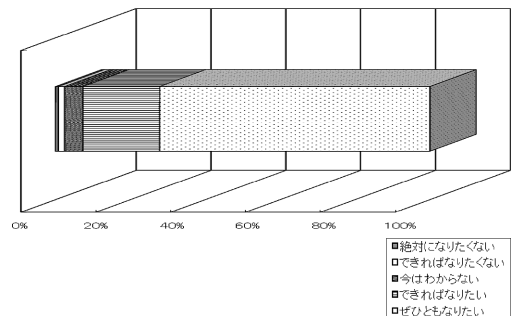


図 3 養護教諭への志向性

表 3 志向性と自己評価・満足度との関係

		自己評価 人(%)			満足度 人(%)		
		高	その他	検定	高	その他	検定
志向性	強く有 (n=88)	60(68.2%)	28(31.8%)	P=0.004**	83(94.3%)	5( 5.7%)	P=0.016**
	その他 (n=35)	21(60.0%)	14(40.0%)		28(80.0%)	7(20.0%)	

## Ⅵ 考 察

文部科学省は、教育課程審議会答申<sup>10)</sup>の「養成と採用・研修との連携の円滑化について（第3次答申）」の中で教員の各ライフステージに応じて求められる資質能力について、初任者の段階では、大学の教職課程で取得した基礎的、理論的内容と実践の指導力の基礎等を前提として、養護教諭については、心身の健康観察、救急処置、保健指導等児童・生徒の健康保持増進について、採用当初から実践できる資質能力が必要であると述べており、新規採用時から養護教諭にはこれらの能力を活用することが期待されている。

本学の学生は、健康観察に関しては養護概説や看護学概論、養護活動論Ⅰ・Ⅱを通して理論を、看護技術Ⅰ・Ⅱ、看護臨床実習を中心にその技術について学んでいる。救急処置についても救急処置Ⅰ・Ⅱを中心に看護技術Ⅰ・Ⅱ、看護臨床実習でもその技術を学んでいる。

本調査で自己評価が低かった学生が、救急処置について「勉強が足りなかった。」「どうしたらよいかわからずあわてた。」「知識不足でいざとなったときできないことが多かった。」と回答していたので、養護実習で体験する健康観察や救急処置の内容について、さらに充実した講義や実習が必要になると考える。

また、中央教育審議会答申<sup>1)</sup>で、深刻化する子どもの現代的な健康課題の解決に向けて、学級担任や教科担任等と連携し、養護教諭の有する知識や技能などの専門性を保健教育に活用することがより求められていることから、学級活動などにおける保健指導はもとより専門性を生かし、ティーム・ティーチングや兼職発令を受

け保健の領域にかかわる授業を行うなど保健学習への参画が増えており、養護教諭の保健教育に果たす役割が増していると述べられている。また、筆者らの調査<sup>11)~13)</sup>でも小・中学生では養護教諭による健康教育への期待が大きいという結果が得られている。

楠本<sup>14)</sup>が、年々養護実習において保健教育を実施した学生が増加していると述べているように、本学の調査結果でも、学生の約7割が保健指導を、約1割が保健学習を、約2割が保健指導と保健学習の両方を、合計するとほぼ全員(97.6%)が養護実習中に保健教育の体験している結果になっている。

本学の学生は、保健科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳや養護活動論Ⅰ・Ⅱで、保健教育の理論や模擬授業を体験している。本調査で自己評価が低かった学生が、「指導案がうまく書くことができなかった。」「もっとしっかり指導案を書く練習をしておけばよかった。」「大学ですすんで模擬授業をしておけばよかった。」と回答しているので、さらに充実した指導案作成についての講義を実施する必要があることが示唆された。

また、子どもの身体的不調の背景にいじめなどの心の健康問題があることなどのサインにいち早く気付くことのできる立場にある養護教諭が行う健康相談活動はいじめや不登校等の解決に成果をあげておりますますます重要になってきている<sup>2)</sup>。

筆者らの調査<sup>15)</sup>でも、学校は児童生徒が一日の大半を過ごす場所であり、様々なストレスを受けることが多い。ストレスによる症状は、身体的症状の他、抑うつ・不安感情、不機嫌・怒り感情、無力感などの心の症状として表れることが多く、このような状況で保健室に来室する

際、児童生徒は自分のストレス状態に気づくことが少なく、体調不良として訴えることが多い。男女ともに、悩みがある時に保健室を利用している者には身体的症状が多い者が多い傾向であった。そのため養護教諭は体調不良を訴える児童生徒に対する効果的な対応が大切であると考ええる。

保健室へ来室する子どもの心身の健康課題が多様化しており、来室者が多い上に、一人当たりの対応時間も増加しており<sup>1)</sup>、平成18年の保健室利用状況調査<sup>16)</sup>によると、小学校の一日の平均保健室利用者数は40.9人で、保健室来室者の1人平均対応時間は11.6分にもなっている。その中で、養護教諭が「心の問題」で継続支援した児童「有」と回答した養護教諭が小学校では76.8%にものほり、養護教諭の行う健康相談活動がますます重要になっている。

本学の養護実習は5単位で、養護実習前にオリエンテーション2回、養護実習のための講義を15回（養護実習反省会を含む）実施しており、その間、出身小学校を中心に基本的には9月～10月に3週間（実質15日以上）の実習をしており、その講義や養護概説、養護活動論Ⅰ・Ⅱの中で健康相談活動の実際について触れている。

本学ではカリキュラムの関係で健康相談活動の講義は3年生の秋学期に開講され、ほとんどの学生が養護実習終了後に受講することになっているが、今後、カリキュラムの見直しが検討されるときには、できれば養護実習前に健康相談活動の講義を開講するようにしていきたい。

今回の調査の結果より、養護教諭への志向性が強くある者は他の者と比較して養護実習の自己評価が高く、満足度も高いことが明らかになったので、養護教諭として必要な力量を習得させ志向性を高めるためには、学外実習は総合的に学習できる機会であり、この機会をより効果的に経験させることが重要であると考ええる。

筆者らの調査<sup>7)8)</sup>では、養護教諭の志向性獲得のためには、実習先の指導教員や児童生徒か

ら、「ほめられる」「励まされる」ということが学生にとって重要な出来事となっていた。本学学生で自己評価の高かった学生は、「積極的に取り組んだ」「ほめられた」と回答していた。同じく、満足度の高かった学生は、「子どもと多く関わることができた」「多くの経験ができた」、志向性の高かった学生は「子どもとの触れ合い」「やりがいを感じた」と回答しており、志向性や満足度に影響が大きかったのは、子どもたちとの触れ合い体験が重要であることが推察された。

学生が養護実習を充実したものにし、養護教諭への志向性を高めるためには、養護実習のための十分な準備を行った上で実習に臨む必要がある。事前の指導（オリエンテーションや養護実習のための講義）を活用し、学生自身が実習の目的をよく理解したうえで、実習に臨むことで、実習の成果を高めることができると考える。また自己評価が低く、満足度を高めるような体験が十分にできなかった学生には、実習後に個別的な支援を行う必要があると考え、本調査を記名式で実施している。

また、子どもたちとの触れ合い体験は、学外実習だけではなく、ボランティア活動を通して体験することができるので、大学での授業だけではなく、様々なボランティア活動を通して教育の現場を体験することが大切であると考ええる。

今回の調査は、あくまでも1つの大学内での比較であり、大学の養護教諭養成の特性が影響されていることも考えられるため、今後他の大学の学生と比較していくことが必要である。

## Ⅶ まとめ

本学で養護実習を履修した学生を対象として、養護実習の内容、養護実習の自己評価、養護実習の満足度、養護教諭への志向性とその回答理由などを調査した結果、健康観察、救急処置、保健指導など多岐に渡る内容の実習をしていた。学生の約7割が保健指導を、約1割が保

健学習を、約 2 割が保健指導と保健学習の両方を、合計するとほぼ全員（97.6%）が養護実習中に保健教育の体験していた。養護教諭への志向性が強くある者は他の者と比較して養護実習の自己評価が高く、満足度も高いことが明らかになった。

#### 謝辞

本学の養護実習に関し、快く受け入れをしてくださった実習校の先生方をはじめ、ご協力いただいた皆様に心から厚く感謝申し上げます。また、調査にご協力いただきました学生の皆さんに感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会答申：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について、2008
- 2) 文部科学省 保健体育審議会答申：養護教諭の新たな役割、1997
- 3) 三木とみ子編：養護概説、ぎょうせい、2005
- 4) 川崎裕美、藤本比登美、保田利恵他：広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 35, 279-284, 2007
- 5) 大谷尚子他：21 世紀における養護教諭養成教育のあり方に関する報告書、日本教育大学協会全国養護部門、1997
- 6) 高岡雅、大谷尚子：学生の養護教諭志向と適正感に関する研究－臨地実習の意義と学生指導のあり方を考える－、日本養護教諭教育学会誌、第 2 巻第 1 号、67-77, 1999
- 7) 野谷昌子、大川尚子、佐藤秀子、山本咲子：養護教諭養成課程の短期大学生の志向性と適性感－学外実習の影響を中心として－、全国私立大学・短期大学（部）養護教諭養成課程研究会誌第 4 号、12-18, 2004
- 8) 井澤昌子、藤井寿美子、大川尚子、佐藤秀子、森川英子：養護教諭養成課程学生の志向性と適性感－新入生への調査結果－、全国私立大学・短期大学（部）養護教諭養成課程研究会誌第 7 号、31-36, 2007
- 9) 佐藤秀子、野谷昌子、山本咲子：養護教諭養成課程における志向性及び適正感に関する研究、関西女子短期大学紀要第 12 号、27-39, 2002
- 10) 文部科学省 教育課程審議会答申：養成と採用・研修との連携の円滑化について（第 3 次答申）、1999
- 11) 大川尚子、野谷昌子、鍵岡正俊ほか：在外日本人学校の健康管理・健康教育について－保健室と養護教諭の現状、関西女子短期大学紀要 16, 69-76, 2007
- 12) 大川尚子、野谷昌子、鍵岡正俊ほか：在外日本人学校における保健室と養護教諭の役割、関西女子短期大学紀要 17, 21-31, 2008
- 13) 大川尚子、森岡郁晴、野谷昌子ほか：在外教育施設における養護教諭の配置状況と健康管理・健康教育との関係、学校保健研究 49(6)、425-429, 2008
- 14) 楠本久美子：「養護実習指導」における「保健教育」の取組についての考察－中学校授業見学を取り入れた「保健教育」の学習効果について－、四天王寺国際仏教大学紀要 46, 63-74, 2006
- 15) 大川尚子、井澤昌子、鍵岡正俊ほか：離島における小規模校の児童生徒のストレス、関西女子短期大学紀要 18, 23-28, 2009
- 16) 日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査報告書、2008